

小村雪岱スタイル ー江戸の粋から東京モダンへ

三井記念美術館（東京・日本橋） 2021.02.06～04.18



「小村雪岱(こむらせったい)」(1887～1940)は、大衆文化が花開いた大正～昭和初期にかけて「画家」と呼ぶには収まりきれない多岐にわたるジャンルに新風を吹込み、多くの人々を魅了した画家である。本展では、画伯の装丁や挿話、舞台処置画に貴重な内筆画など江戸の粋を受け止め、東京のモダンを体現した作品を総合的に紹介している。

さらに、「鈴木春信」の《浮世絵》や「並河靖之」の《七宝》をはじめとする明治時代の工芸の数々を通して「江戸の粋」から「東京モダン」へと至る系譜に加え、彼らの要素を引き継ぐ現代作家も合わせて鑑賞できるため、「雪岱スタイル」と呼ぶべき、繊細かつ洗練された美の世界を堪能することができる内容の企画である。

小村雪岱《青柳》1924(大正13)年頃 彩色・絹 上図は部分

画伯の肉筆の名品がそのまま「版画」になった極めて珍しい作品である。

本作は、三味線と二つの鼓、それを手にする筍の主人の不在にまるで舞台のような室内に柳が描かれているが、雪岱版画とはつまり戦時下という状況で、肉筆絵画世界を後世に伝えようという意図で制作された特殊なものである。

小村雪岱 《おせん雨》木版画 1941(昭和16)年



画伯の名前を一躍有名にしたのが「邦枝完二」作の小説「おせん」(下図)の挿話で、江戸の年間(1764～1772年)に実在した谷中の笠森稻荷門前の水茶屋の看板娘「笠森お仙」がモデルの悲哀物語である。

作品は、新聞連載の挿話原画で、穏やかな線で描くことにより微妙な奥行きがあり、細部にまで丁寧に描かれている。

他の画伯の主な作品としては《盃を持つ女》《月に美人》などがある。

